
春夏秋冬、非日常的な日常奇談

返歌分式

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春夏秋冬、非日常的な日常奇談

【Nコード】

N7911S

【作者名】

返歌分式

【あらすじ】

始まりは春。高校二年生になる逆須木黒途はあるものに想いを寄せていた。それは『桜の木に生えている腕』だった。次は夏。悪食に気に入られている彼は猫を拾った。それは悪食が唯一食べられないものだった。次は秋。彼は愛の言葉で黒く塗りつぶされたラブレターを貰った。それは彼のよく知る筆跡だった。次は冬。彼は大切なものを奪われた。それは彼をもう一度壊そうと笑う。靈感を少しだけ持つ逆須木黒途の一年を語る話。

桜の手

春。夏と同じくらいの紫外線量を撒き散らす太陽の下、オレは桜の木を見上げていた。

満開の桜。この桜の木はそこらに立っている桜の木よりもよつばど立派なもので、その姿はオレを含めた他の者に圧巻を与える。重たそうにしている、花を多くつけた枝がオレの目の前に垂れ下がっている。オレはそれをなんとはなしにつついて揺らした。

今は桜シーズン真っ只中。そこらに桜が咲き乱れ、一般の人たちはつまみや噂を肴に花見をする季節だ。そしてそれと同時に、今年入ってきた新人生達が慣れないクラスにそわそわする時期でもある。新人生以外にも、一つ年をとって繰り上がった学年の生徒達も、今年当てられたクラスに新人生同様の反応をしているだろう。

オレは今年で高校二年生になる。

自分も例にもれず、慣れないクラスに息苦しく過ごすのだろうと春休み中は不安に鬱々としていた。だがそんなオレの懸念も取り越し苦労だったようだ。

新しいクラスは見知った顔が多かったので、新学期からそれほど窮屈な思いはしないだろうと思え、オレは安心した。認めたくはないが仲の良い友人や、幼馴染が同じクラスなのも幸いだ。

オレは一つ息を吐いて、見上げていた目線を桜の木の幹に移した。

そこには、青白い腕が生えていた。

肘から先の、細さからして多分女の人の腕。

腕の部分は突き出されるように幹から生えている。

手が力なく垂れ、青白い血管が浮き出た甲をオレに晒している。

その有様はまるでこの桜の木の枝のようだと思えた。

これは、オレが子供の頃から生えている腕だ。

そしてこの腕は毎年決まって春にしか、それも桜が咲いている時期にしか生えないものだった。

オレはそれを見つめる。

すべやかで美しい死人の腕はピクリとも動かない。

オレは自身の顔にかかっている黒縁眼鏡を指で押し上げたあと、また一つ息を吐く。

らしからぬ、物憂げなオレに、桜が笑うように木の枝を揺らした。

「楽しいパンの、パン祭り♪」

「……なんか違うくねえーか？」

「奇遇だな。俺もそう思ったんだよ」

学校内、教室の中。午前の窮屈な授業が終わり、昼の休み時間になった頃。

解放された生徒達が各々に教室の中で談笑しあい弁当をあけ始めている中、もう昼だというのに今更登校してきた友人が、いきなりオレの席に来て変な歌を歌いだした挙句に「あれえ？」と首を傾げた。

オレはそれを無視するように、読んでいる小説から顔をあげず、ずれてもいない眼鏡を癖で直した。

「なんだったけかなあ」

「春のパン祭りじゃないか？」

「ああそうだそれだそれ！　楽しいパンの、春祭り！」

「楽しいのところはヤマザキじゃないか？」

「え、嘘！　俺間違いまくりかよー！　ヤマザキ春の、パン祭り！……なんだろう、なーんか違うような気がする」

「……オレも思ってたところだ」

「このやろつ。嘘教えやがったな？」

合っているのかどうか分からない。

合っているような気がするし、合っていないような気もする。
いや、合っているはずだ、多分。

オレは正しいフリーズを思いだせずに眉をしかめる。おかしい。
知っていたはずなのに。目の前の野郎のせいだ。頭から友人が最初
に歌ったものが離れない。

「オレは悪くねえぞ」と言い、小説からしかめた顔をあげる。

口をへの字に曲げ、至極不満そうな顔をした友人、東堂 裕真が
腕を組みながらオレを見下ろしていた。

不満げながらも何故か自信が見え隠れするその顔がまた妙に腹が
立つ。

オレは新学期初めて見た友人をじろじろと眺めた。

注意されない程度に着崩れた制服、緩く結ばれた学校指定のネク
タイに、空いた胸元から覗く銀色のチェーン、耳には右2つ左1と
ピアスが空けられ、痩せている見た目の割りに筋肉があり背が高く、
顔はそこの女子が好みそうな形をしている。

傷んだ黒髪が変に跳ねており、ところどころ染めるのを失敗した
のか鮮やかな茶色が人工的な黒から覗いていた。オレはそれらを見
てよくもまあそれで先生からOKを貰ったものだと感じた。

そして思ったままにそれを口に出す。

「よくそれで学校に来れたな」

「ああ？ 俺これでも頑張ったんスよ？ ちゃんど髪の毛も黒く染めて、オシャレも控えめ！ なのに黒ちゃんも先生と同じこと言っんスか？」

「やめる。その名前も口調も気持ちが悪い」

「ふはー！ もっと気持ち悪がれ！ くっろちゅわん♪」

「心底気持ち悪いんでどっか行け」

「……真顔で言っなよ」

大げさにたじろいだフリをする裕真に呆れ、大きな息を吐く。
そんなオレを裕真はにこにこ、いや、にやにやと笑いながら見ていた。

これ以上構っていても疲れるだけだ。オレはそう思い小説に目を落とす。が、目を通して数文字でオレの手から小説が抜き取られた。

「何するんだ！」

「うえ。難しっ。なにこれ誰の小説？」

「志賀直哉だ。暗夜行路、知っているだろう？」

「いや知らない」

「貴様は何のために生きているんだ！」

「アホかお前！ いやアホだったなお前は！ 本一つ知らなかっただけで俺の人生全否定すんな！」

「本一つ知らなかっただけで？ 貴様本を読まずの人生の何が楽しいんだ！」

「自分のものさしで測るなっつーの！ 人生楽しんでるよ俺は！」

「お前が人生を謳歌してるかしてないかなんてどうでもいい。とりあえず返せ、オレに。ほらさっさとしろグズ！」

「ホント本のことになると口わつるいなあ黒ちゃんはいはい返しますっつの」

裕真は開かれた小説を丁寧に閉じて、オレに差し出してきた。

オレは裕真の腹を殴る。「いつてえ！」という声を無視して先ほどまで読んでいたページを開く。

裕真が来た時点でページ数を見ていて良かった。手早く押し花の葉をさし、閉じる。

小説を鞆に戻し、顔をあげると仏頂面があった。

「昼飯、どうする」

「朝飯も昼飯も食べてきてねえー。買っても来てねえー」

「何しに来たんだ、お前は」

「勉強？」

「ほざいてる」

「あれ、俺今すっごい優等生の回答したのにな！」

「却下」

「マジで！？」

マジかよマジかよーと言う裕真を放って置いて、オレは机の上に
出された教科書類を片付ける。新しいノートには、自分でも神経質
そうだと思える字で『逆須木 黒途』と書かれているのを目に、そ
れも机にしまう。

鞆を机の横から取り肩にかけてオレはそこを離れた。

「お、ちょ、待てよ黒ちゃん！ 一緒にご飯食おーぜ！」

「たかるなよ？」

「いや、たかるに決まってるだろ」

「さようなら」

「ああ待てつて！ 分かった分かったちゃんと食堂で買っから！
というわけで黒ちゃん、俺人ごみ嫌いだから俺のためになんか買っ
てきて！」

「グッバイ、フォーエバー」

「冗談だっつの！」

ハエのようにオレの周りをちよろちよろする裕真に向けてシッシと手で払い、それでも尚オレについてくる裕真の気配にうんざりする。

どうやって撒いてやろうかと考えている途中、オレはふとあの桜のことをコイツに相談しようかと思った。

後ろをちらりと見ると、ズボンのポケットに両手を突っ込んで変に笑っている裕真がいた。気持ち悪い。

オレはなんだか、一瞬でもコイツに話そうかと思ったことが恥ずかしくなった。裕真を置いていく勢いでオレは足を進めた。

自分の逃げていた先がまさか食堂だったとは思わなかった。

オレはその時恥ずかしさに思考を支配されていたんだ。それは仕方無いことかもしれない。そう、仕方の無いことなのだ。

そんな言い訳を自分に言い聞かせ、オレは帰りの支度をする。

昼休みの時、オレは結局食堂で裕真の分のパンや飲み物を買うはめになった。全学年の生徒達が密集するあの中にオレは果敢に挑み、売り切れがかったパンを奇跡的に手にし、ついでに頼まれた飲み物を自分の分と合わせて買ってやったのだ。

当然の如くオレの金だ。

食堂の入り口で待っていた裕真の「おつかえりー」という言葉が腹に立ち、オレは問答無用で裕真の財布をひったくり、利子付きで金を返してもらった。

後のことはどうでもいい。オレにとって大事だったことは、オレが感じる必要のなかったストレスと使う予定では無かった金のことだけだ。それらはもう清算されたので、どうでもよかった。

だが、中庭でご飯を食べただけは追記しよう。

帰りのHRを終え、生徒達がそれぞれ帰宅していく。

掃除当番が箒を片手に教室を掃除し始めていた。

オレは速足に学校の校舎を出る。校舎の裏手の玄関から出て、自転車置き場に向かう。

自転車置き場は校舎を出てすぐ左、道路のように舗装された道を行けばある。オレはそこを歩く。

右手には広い憩いの広場があり、少し進むとフェンスで囲まれたテニスコートがある。そしてその先。

雨避けのトタン板の下、自転車共が無造作に置かれていた。

トタン板の下にあるべき自転車の一部が、道に溢れかえっている。マナーの悪い奴らのせいだ。

深緑色のオレの自転車の鍵を外し、手早くそこから出す。こちらに向かつてくる生徒や道に溢れた自転車を避けながら、オレは学校の門から出た。

学校の前は道路だ。しかもその距離は近い。

危なっかしいな、と毎度ながら思う。

けどそんなことはいい。

そんなことよりも、オレは早くあの場所に行きたいと思った。

自転車を漕ぎながらその場所のことを思い浮かべ、徐々に気持ちが急いていく。

逸る気持ちを抑えきれなくなった頃、オレは立ってペダルを忙しなく動かした。

歩行者が歩く道。横手には桜。桜、桜が花びらを散らしている。

その桜達は普通の木だった。

普通に誰の頭の中にも思い描ける、そんな大きさの木達だった。オレの求めているのは桜だ。だけど普通の桜ではない。

青白い腕の生えた、大きな桜の木だ。

十分程。母校である小学校の近くに着いたオレは、小学校の前にある小さな横断歩道を渡る。

そしてそのまま真っ直ぐ、緩やかに下に向かって傾斜している短い道を行き、蔓を絡ませた鉄のアーチをくぐる。

そこを抜けると、満開の桜がオレを待ち受けていた。

自転車の速度を落とし、降りる。すぐ近くにある学校と似た自転

車置き場にとめて、オレは歩きだした。

今度は上に向かって傾き、勾配している短い坂の上。桜は存在を主張するようにそこにあった。

オレはここに住む住民達が、酷く羨ましくなった。

この桜が立つ場所は、五階建ての箱のようなマンションが立ち並ぶ住宅地なのだ。

マンションの前には、順に自転車置き場、その背を沿うように坂道、集会所である平屋の建物が建った広場があり、その広場に桜の木が立っている。

近寄り、今日も青白い腕がそこにあることを確認したオレは、スツと頭が冷えるような感覚を味わった。

帰ってきた。そう感じる。

オレは住宅地のマンションに昔住んでいた。

小学五年生の時にここを引越したのだ。

オレはその時物凄く抵抗した。ここを離れなくなかった。

両親は、大人しく良い子だったオレが騒ぎ抵抗したことに驚いていた。

桜の木から離れたくない。

その一心で暴れ、泣き、皆の説得を聞き入れなかった。

そんなオレに両親は折れた。

この住宅地から駅三駅程離れたところにある、父側の祖父と祖母が住む家に越すことにしたのだ。

桜の木の幹から腕が突き出されている。

力無くくたりと下を向く指先。

オレの胸の高さに生えた、桜の腕。

数分眺めた後、オレはその幹に背を預けて本を読むことにした。
鞆を覗くと携帯電話にメールが届いていると知らせるランプが点滅している。

開くと、同級生の幼馴染からだった。

『今日どっか行こうよ』

絵文字が使われたメール。

北西 きたにし 杏奈 あんなと表示されたそれに、オレは『無理。用事ある』とだけ書いて送信した。

桜の木を背に、オレは小説を開いた。

暗くなってきた小説の文字が読みにくくなったので、オレは家に帰ることにした。

街灯がちらほらと辺りを照らすように点き始めている。集会所の横にも街灯があるが、春、それに明かりが灯されることはない。

桜を美しくみせるための人の手による配慮か、それとも青白い腕の仕業なのか。オレは後者ならいいと思った。

短い坂道とは別の、自転車置き場の横にある僅か数段の階段を下りる。とめてあった自転車を出し、それに跨って家へと向かう。数十分してそこに着いた。

今はオレの家でもあるそこは、周りのコンクリートの家や一軒屋に比べると、広く古かった。

瓦葺の、屋敷に近い平屋だ。横に長く続く垣根からも、その堂々とした佇まいを窺える。

門を開いて中に入ると、この屋敷に相応しい広い庭がある。祖父や祖母の手が加えられた壮観な庭だ。

自転車を外から見えない、かつ庭の景観を崩さない場所に止めて玄關に向かった。

明かりがもれる引き戸に鍵を差し込み捻る。カチリと音がして、引き戸を開ける。

暖かな光がオレを出迎えてくれた。和やかな空気に入知れず息を吐く。前住んでいた家とは比べものにならないくらい広い靴脱ぎ場で靴を脱いでいると、兄が玄關先に顔を出した。

兄も今帰ってきたところなのか、首元を緩めたスーツ姿で何故かおたまを持ちながら柔和な笑みを浮かべていた。

名前は蒼也。^{あおや}悪く言えば優男。良く言えば美男。病的とまでは言

わないまでも、男にしては白い肌や色素の抜けた茶色い髪の毛は、母さんによくからかい混じりに妬まれている。

「おかえり」

「ただいま」

「ご飯出来てるぞ」

「なに」

「黒途の好きなサバ味噌」

「そう。折角だけど今日はいらない」

「なんでだ？」

「お腹空いてない」

「そうか。母さんに伝えておくよ」

「ああ。ありがとう」

兄と並んで廊下を歩き、オレは途中の階段で別れた。手摺りのついた階段を上り、さらに廊下を歩く。オレの視界に入る風景に、まるで小さな旅館のようだと思った。ここに住んで数年経つが、オレはまだこの家に対して他人のようなよそよそしさを感じていた。オレは自分に割り当てられた部屋の襖を開ける。

和室。元は客間なのか、一人部屋にしては広い部屋だった。

肩にかけていた鞆を置き、オレはすぐさま押入れを開く。畳まれた布団を一式出し、真ん中を陣取っている背の低い机を避けるように敷く。

部屋の隅にある桐のタンスから寝巻きを取り出し、さっさと着替え電気を消して布団の中にもぐり込んだ。

しばらくの時間、眠るために目を瞑っていたが、興奮状態にあるオレに睡魔は来なかった。仕方なく目を開ける。暗闇に慣れた、だが眼鏡を外しているおかげで全てがブレているように見える目は、天井の木目らしきものを映した。

ぐにやりぐにやりと歪む視界。オレは睡魔が来るまで考える。

オレにとって、春とは何かと忙しい季節だ。オレの生活の中心が、桜の木になるためだ。

春以外で成されてきた生活のリズムが、狂わせられる。望んで狂わしている。

浮かんでくるのは桜の木の青白い腕。

ぴくりとも動かず、怪談物でありがちな手招きすらしない。

ただそこにある腕。

自分のこの考えが異常だということを、オレはとうの昔に知っていた。

感覚が異常なのだろう。オレはあの白い腕を綺麗に思えた。

オレ以外の人間にはまともに見えているのである。桜の木。おぼろげながらも、普通の人には見えないものが見えるオレが、唯一はつきり見ることができる腕。血の通っていない、ただどまるで生きているようにさえ思える雪のように白い、腕。

桜の木のことを考えていると、ぐっすりと眠れない。

まるで恋だな、と思い、その考えに笑う。

異常だ。異常なのだオレは。そう分かっていても、考えることをやめられない。

オレは深夜まで桜を夢想し、意識を失うように眠りに落ちた。

四限目の終わり、担任が担当する授業で、担任の代わりに生徒が教卓に立っていた。男女二名ずつ。クラスの学級代表とホームルーム委員は黒板に書かれた文字から振り返り様に言った。

「では、どれに出るかは各自で決めて下さい」

「五時間目までに決めてねー」

ホームルーム委員の軽い声を合図にチャイムが鳴った。座っていた生徒達が思い思いに席を立ち散らばっていく。

ざわめきをBGMにオレは黒板に書かれた『春の体育祭』という文字と、その下にある種目をぼんやりと眺めていた。

「おい。生きてるか黒ちゃん？」

「ちょっと大丈夫？ あんたいつもぼーっとしてるのに、さらにぼーっとしちゃってさ。なんだか魂が抜けかけてるみたいよ？」

声にそちらに目をやる。

裕真にもう一人。北西杏奈がいた。

心配に彩られた顔がオレの顔を覗き込んでくる。

オレはそれを避けながら、横目に杏奈を見た。

艶のある黒い髪の毛は背中流され、白く透き通る肌を強調しているように見える。化粧気の無い顔は小さく、唇は誘うようなピンク。制服を押し上げる胸が、目のやり場を困らせる。ような気がする。

裕真が女受けする奴なら、杏奈は男受けするような奴だ。

北西杏奈を評価する声には、地上に舞い降りた天使だ、という馬鹿げたものさえある。

オレは答えるのがめんどくさくて適当に返事をする。二人は互いに顔を見合わせて怪訝に眉をしかめた。

「お前春になるといつつもそうだよなあ」

「春は出会いの季節って言っし、もしかして黒途もその口？ え、なにそれすごく面白そう！ ねえねえ黒途、そうなの？ そうだったしちゃうの？」

「毎年毎年恋うつつって？ 黒ちゃんがー？ そんなプレイボーイだったら、俺様の敏感な嗅覚が黙ってるわけないって。もしそうならとつくに黒ちゃん連れてナンパに行ってるっつーの！」

「なによそれー！ ナンパナンパって、そんなんでちゃんとした恋愛できるー！？」

「俺上級者だから。いわゆる人生の勝ち組っての？ 持ってるもんが違っんだよ！ 俺は付き合う全ての女の子達を愛してきたさ……」

「顔が良いだけで、頭は春爛漫のお花畑。あーやだやだ。こんなのがモテるだなんてホント世の中怖いわ」

「滲み出てんだよ、オーラが。それにつられたかわいい蝶々達が、ああ！俺に酔う……」

「はいはいお花畑お花畑。自分に酔うのも大概にね」

「ひっでーのおー」

拗ねる声を見捨て、杏奈がオレの座る机に手を置く。
さりげなく胸を強調するような体勢に、扱い方を心得ているなあとぼんやりと思った。

「で、どうなの？」

「……別に」

「別になによー。気になるうー」

「俺も気になるうー」

「気色悪い気持ち悪いキモイ声出してんじゃねえよ馬鹿が！」

「おっ。黒ちゃんちょっと戻ってきた！」

暴言を言われ慣れている裕真は、にはにはと笑ってそんなことを言った。

杏奈が「真似しないでよ！」と言って裕真の頬を抓っている。軽く背伸びをしている杏奈を見てオレはもう一度心得てるな、と感想

を持った。

オレはうるさい二人を放って教室内を見回した。

教室に残って弁当を食べている生徒達が、二人に注目しているのに気がついて不愉快に顔を歪める。

美男美女である二人がじゃれ合っているのを皆が見るのは、ある意味必然だ。仕方ない。仕方が無いし、オレにとってはどうでもいいこともある。

だがその近くにオレがいるということが問題だ。皆にとっては風景の一部と化しているであろうオレだが、一切意識されていないということは無いだろう。

オレは極力目立ちたくない。空気になりたいとさえ思っている。窓際でいつも本を読んでいる暗い奴。その程度でもいい。

二人の友人であるという立場に、優越感を覚えなないわけではない。それによって起きてくるやつかみが面倒臭いのだ。

特別劣等感を持っているわけではないが、二人に比べると少し自分にも少し嫌気が差す。

ジレンマに頭を抱えた。

「ま、その話は飯食いながらも。なあ黒ちゃん」

「私も一緒にいい？」

「俺と一緒に食べたいだなんて、とうとう杏奈も俺の色香に……！いいぜ！ 飛び込んでこいよ俺の胸に！」

「え、やだ」

「あーもうひどいなホント！」

「私からあげ食べたいから食堂行こー!」

「俺人ごみ嫌い! つうわけで杏奈ちゃん俺の分も買って来て!」

「え〜? そこは普通男が行くもんでしょ? レディースファーストよ!」

「うつせえなあ。レディースファーストっていうのはスカートを下から覗くためにあるもんなんだよ! それにレディースファーストって言っんならなおさら杏奈ちゃんが買いに行くべきだろー!」

「嫌、あんた最っ低! 馬鹿じゃないの!? もういい! 買ってくるから!」

「弁当お願いしま〜す。中庭で待つてるからなあ!」

「分かった。ちゃんと居てよ? いつてきま〜す!」

裕真とオレに手を振りながら、杏奈は小走りに教室を出て行った。寝不足のせいか霞がかった思考の隅で「んじゃ、行くか」という裕真の声が聞こえた。

オレはその言葉に従うように、のろのろと自分の鞆を取る。

ついていく意思を見せたオレに、裕真は快活な笑みを浮かべた。

「なんか悩み事があるんなら、俺や杏奈が聞いてやるよ。だからあんま一人で抱え込むなよ?」

「……………ああ」

「よっし。んじゃ中庭行こうぜ」

先導する裕真の後ろについていく。

昼ご飯を食べている生徒が多いからだろうか、昼休みには人が少ない廊下を歩きながら、オレは裕真や杏奈に桜のことを話そうかと考えた。

高校に入ってから、その気持ちは強くなっていつているように思える。

一年生の時は、それでもまだ時の流れに流されるようにして、なあなあで過ごしたため話をすることはなかった。

だけど、今年はどうだろう。オレは、話したいのだろうか。

中庭に着くまでの間、オレは裕真が喋った会話の内容が頭に入らずに、桜のことばかりを考え続けていた。

噴水の中央に立つ壺を持った女性像が、その壺から水を湧き出させている。水を受け止める噴水の縁には、小さな獅子の顔が二つ。あんぐりと開けた口からこちらにも水を吐き出していた。

木が林立する中庭で、オレは噴水の女神像を眺めながらぼんやりと自分の弁当をついついている。

オレを挟むようにして二人もベンチに座っていた。春にしては少し熱い陽光を、ビーチパラソルを大きくしたような屋根が防いでくれている。

ベンチに座ってからのんびりとした空気が漂う中で、杏奈がクリームたつぶりのパンをちぎりながら口を開いた。

「ねえ、二人は春の体育祭何に出るの？」

「うーん。そうだなあ……。俺障害物競走とかいいなとは思ってるけど、どうせ今年もリレーやらなんやらに出されるんだろうっしなあ」

「あんだ運動神経いいもんね。黒途は？」

「まだ決めてない」

「そうなの？ 私もまだ決めてないんだよねー」

そう言っただけでほんと笑った杏奈はちぎったパンを口に運ぶ。その後からあげを食べているが、それで味が分かるんだろうかと心配になった。

「それじゃあ俺と一緒に二人三脚でもやらね？」

「やだ。あんたとやるぐらいなら黒途とする」

「なんだと黒ちゃん！」

「オレは何も言っていないぞ」

杏奈が買ってきてくれた、プラスチックの容器に入ったやきそばを食べながら裕真がオレを睨んでくる。

ずるずると盛大な音を立てているのがうるさい。杏奈もそう思っていたのか、注意するように人差し指を裕真に向けた。

「ちょっとあんたうるさい！」

「やきそばは音を立てて食うもんなんだよ。それが礼儀つてもんだ！」

「そうかもしれないけど、あんたの場合は音でかすぎ！ やきそばに礼儀を払うなら周りの人にも礼儀を持ちなさいよね」

「なるほど。まったくの正論だ！」

「そう思っただったら音を立てるのやめなさい！ あーもつづるさい！」

なるほどとは言ったものの、裕真はやきそばをすすする音を止めることは無かった。

杏奈が身を乗り出して裕真の箸を奪おうとするものだから、オレは自分の弁当を高くあげて避難させる。

横から「う、うめえ！ うめえ！」とか言う声が聞こえてきてイラッとしたので、オレは近くに落ちていた木の枝を裕真の鼻に刺してやった。

予想外の攻撃だったのか、裕真は口元を押さえてむせた。

「何すんだ黒ちゃん！ 危うくやきそばを嘔くところだったぞ！」

「あー、スマン」

「誠意が感じられん！ 土下座しろ土下座！」

「黒途ナース」

裕真の言うことを無視して、杏奈が突き出してきた手の平に向けてハイタッチする。

「悔しい〜」とかなんとかほざいている裕真がオレの玉子焼きを強奪していった。あつ、と思った時には裕真の口の中に入っており、オレは木の枝を再度構えた。

「やめろよ黒ちゃん！？」

「食べ物の恨みは、怖い」

「いやそうだけど、これは黒ちゃんが全面的に悪いからな！」

「そうか」

「あーもうホントごめん！ だから木の枝はやめて！」

「あはははは！ 裕真バツカみたい！」

杏奈に笑われたことによって反省したのか、裕真は酷く傷ついた顔をして大人しくやきそばをすすった。

いつものやりとりが一段落した後、話は春の体育祭に戻ってくる。春の体育祭というのは、オリエンテーションを兼ねた行事だ。今年入ってきた一年生が学校に慣れるための行事でもある春の体育祭は、秋の体育祭に比べて力を入れないものの、それなりに種目がある。

短距離と長距離走、学級・学年対抗リレーにクラブ対抗リレー、など体育会系の奴らが喜びそうな種目を中心に、障害物競走や二人三脚、台風の目やムカデ競争や綱引きなどの種目がある。

ただ走りがメインであるせいか、春の、とついているわりには華やかさのない行事だ。

秋の体育祭となれば騎馬戦やら二人三脚がレベルアップした十人十色と呼ばれる、十人並んで走るものもある。うまいことを言っているように見えるが、全然うまく言っていないとオレは一年生の頃から思っている。普通に十人十一脚でいいだろと思っていた。

その他籠追いや応援合戦など、秋の体育祭は団体戦中心で、春と秋を比べたらその差が分かる。

そう考えると、春の体育祭は一年生のための行事なんだという

ことを再確認するため、オレはやる気のない気分が際立って、どれに出るか本腰を入れることができなかった。

オレは行事に対してそこまで熱心になるタイプではない。秋の体育祭も他の行事にも、どれに出るか何をするかと積極的になりはしない。ただ、これは気分の問題だ。それに毎年色々ある春だということもある。春は特別やる気が出ない。オレは二人が何に出るかと言っている間ずっとぼーっとしていた。

「ちよつとおー、黒途ー。話聞いてるー？」

「ん？ 聞いてなかった」

「わー、正直者だな黒ちゃん」

二人共あれだけ話まくっていたのに、もうご飯は食べたようだ。それに気付いたオレは慌てて自分の弁当を空にするため箸を動かす。

「んじゃ黒途、やっぱ私と一緒に二人三脚に出ようよ」

「おわー黒ちゃん羨ましい！ それでご返事は？」

「やっかみ買うからパス」

「ちよつと何よそれー！」

杏奈が怒って声を荒げた。

人の目を気にしているオレに怒っているのだろうが、事実だ。

一言「ごめん」と言う杏奈はそれ以上怒らなかったものの、不機嫌そうに口を尖らせてそっぽを向いた。

裕真が「フラれたー！」とか余計なことを言い、杏奈が裕真を睨みつける。その顔は、二人に挟まれるようにしているオレにも見えるわけで、無言の重圧にオレは裕真を呪った。

「まあ黒ちゃんもそこまで出たいって言う種目が無いなら、五六時間目で勝手に決まるでしょーよ」

「だな」

「……まあ、そうね。私が無理に誘わなくても勝手に決まりますわねー」

「そんなに機嫌悪くなるなよ」

「黒途のせいよ！　ってなわけで、今日は私に付き合いなさい！」

「俺も俺もー！」

「あんたは呼んでない！」

「うわひでえ！　俺も行くなにがあらうと山があり海があらうと俺も行く！」

拳を握って力説する裕真。オレはようやく自分の弁当を空にでき

たことに安堵し、弁当箱を鞆の中にしまった。

顔を上げて校舎に貼り付けられた時計を見る。立木のせいでよく見えなかったが、もうそろそろ昼休みが終わる時間を指そうとしていた。

思いの外時間が経っていることに驚く。

「あ、もう昼休み終わりかよ」

「早っ。じゃあもう教室に戻ろっか」

「そうだな。行くか」

オレの言葉を合図に二人が立つ。

屋根の下から出ると、きつすぎる陽光が肌を焼くように照り付ける。

眩しさに目を細めると、変な気分になった。眼鏡をかけているにも関わらず視界がぐにやりと歪んだように見える。

ぼうつと太陽の出ている方向を見ていると、裕真の怪訝そうな顔が入ってきた。

「何してんだよ。早く行くぞ」

「ああ」

裕真の言葉に我に返ったオレは慌てて二人の後に続く。

寝不足のせいだろうか。少し、疲れているような気もするし……。

二人の談笑にまたしても挟まれる形になったオレは、小さくため息を吐いて教室に戻った。

五六時間目は総合だ。授業は無く、行事ことやなにやらを決める時間。裕真の言っていた通り、なんの種目でもいいオレは体育委員に勝手に決められた。

裕真が入りたがっていた障害物競走だ。オレの斜め後ろ後ろの席に座っている裕真に顔を向けると、悔しそうな顔をするでもなく手を振られる。

それに少しがっかりしたオレは肩をすくめた。

春の体育祭のメンバーが決まり、放課後。

帰り支度を終えたオレによってきた二人が、二人してオレの手を掴んだ。

オレは嫌な予感がした。捕獲された宇宙人のように両腕を封じられたオレは、二人を交互に見る。両者共、笑っていた。

「よし、それじゃあ遊びに行きましょうかー！」

「おう！　なんか食おうぜー！」

「あ、それなら私美味しいクレープ屋さん知ってる」

「クレープ!?　どこよそれ！」

「私が案内してあげるから慌てない慌てない。んじゃ目的地も決まったし、行こうかー！」

「おー！」

「ちょ、なんで二人共オレの腕を……」

オレの言葉に二人は答えてくれることもなく、オレは引きずられるようにして学校を出ていくことになった。

ああ、またか。

オレはいつもの二人の行動に諦めの境地でクレープを食った。

「ここがその場所です」

「あー……」

商店街で買ったクレープを片手に、杏奈がそっちに向かって指を指した。それに裕真が渋い顔をする。

オレ達三人はその場に立ち止まりながら、そこを見ていた。短いトンネル。歩いて数十歩程で向こう側に出れるような、そんなトンネルだった。

壁にはやんちゃな子供達の落書きがあり、どれもこれもスプレー缶で噴き掛けられたものと分かる。

オレはサラダクレープを食べながら「で？」と杏奈に訊ねた。

「ここが、なんだって？」

「怪奇現象が起こる場所だってさ。いわゆる心霊スポットってやつ？ なんでもここで死んだ人がいるとか」

「こんな短いトンネルで死ぬなんて何があっただんだよ」

「私は知らないわよ。瑕軌がそう言ってたのを聞いたただけだし」

「きずき？ ああ、あの電波ちゃんか」

裕真が納得言ったように頷いた。

オレはきずきという人を知らないので、裕真の言った電波ちゃんという言葉に反応する。

裕真はオレが不可解な顔をしているのを見つけ、「まあ虚言癖のある子だよ」と説明してくれた。

杏奈はその説明に不満そうにしたが何も言わなかった。おそらく杏奈もそれを認めているのだろう。

「あー、ここはハズレ。何もいない」

「えー。いないのー？」

「いたらいたで嫌だろ。こんなところでさあ」

裕真の言葉に杏奈が「まあそうだね」と頷く。

地形のせいとそのトンネルの周りだけが暗いので、これなら何か出てもおかしくない、と思うのはしょうがないことかもしれない。

落書きや投棄されたゴミで、さらに閑散とさせている印象を作り出しているおかげもあるのだろう。

オレは眼鏡を少しずらしてトンネルを見た。ぐにやぐにやする視界には何も映らない。

裕真がいちごクレープをもくもくと食べながらつまらなさそうにした。

「もつと良い場所ねーのかよー」

「あと私が知ってるのって言ったら、夜の公園で出る女の人の幽霊とか、夜歩いていると後ろを追いかけられるだとか、夜にしか出てこないやつばかりだよ」

「二つ目はそれ普通にストーカーじゃね？ ま、今見れるところがいよいよな。電車に乗って隣町に廃墟があるって聞いたことあんだけど、今からそこ行く？」

「えー。めんどくさい。地元で無いの？ 裕真そういうの好きだし他に知ってるでしょ」

「行き尽くしたんだよ」

「呆れた。どんだけ好きなのよ」

「だって俺見えるし、見なきゃ損でしょ」

「そんなことしてたら痛い目見るよ」

「あはは。だろうなあ。まーあ、俺のコレはもう直らないし治す気無いし？ またエライ目に遭いたくなかったら俺から離れた方が懸命っつー話だよなあ。なあ杏奈？」

「……そうね」

杏奈の顔が苦悶の笑みに歪む。

オレは非難がましく裕真を見る。裕真は「しまった」という顔を
してそれを隠すようにクレープを食べていた。失言か。

オレは裕真や杏奈に声をかけることは無かった。杏奈がそんな顔
をする理由を知っているからだ。

昔のことを思い出して少し落ち込んでいるのであろう杏奈は、顔
を俯けながらチョコクリームのカレープをちまちまと食べる。

釣られるようにして昔のことを思い出したオレは、そういや昔
はオレもあの腕以外は何も見えなかったんだよなあと、視覚が平和
だった昔を懐かしんだ。

生粋の『視える人』である裕真が無茶してくれたおかげで、オレ
はこんな目になった。

昔は乱視なんかも無かった。眼鏡を通さないと世界が歪んだよう
に見えるのも、無かった。

……まあだからと言って恨むつもりはないけども。

恨みはしないが、なんでわざわざこうも自分から危険な場所に行
こうとするものか。

オレには裕真のそこところの神経が理解できなかった。

「く、黒ちゃん。黒ちゃんはどうか知ってる？ 面白いところ」

「面白い、か……」

オレは桜の木のことを思い出していた。あれはどうなのだろう。
霊などを見る力などが無かった昔からはつきりと見えていて、今
もオレの心にいる腕の存在。

オレの一瞬の迷いに、裕真は期待の眼差しを向けてくる。

「知ってんのか？」

「面白いかは分からないけどな」

「おー！マジカー！　よっしゃそこ行こうぜそこー！」

一転して子供のように喜ぶ裕真にオレと杏奈は呆れのため息を吐いた。

短いトンネルの前からUターンし、歩いて二人をその場所にへと案内する。

オレの自転車の前カゴに入れられた三人の鞆が、ちょっとした段差で揺れた。

「黒ちゃんは昔から馬鹿だから、期待できるなー」

「どついう意味だ、それ」

「ん？　そのまんまの意味。黒ちゃん無意識で危ないことに首突っ込んでるしさ」

「……………」

「それ分かるかも。黒途の周りって、変なこと起こりやすいしね」

「そぞ。本人が首突っ込む＋引き寄せ体質。馬鹿なんだよ、基本」

オレは何も言えなかった。

自分ではそうではないと思うも、それを断固として否定できる程の言葉と確信を持つていなかった。

だがそれらを裕真の自論によって馬鹿と一括りされるのは腑に落ちない。オレに非が無いことを、さもオレが悪いといったように言われるのは癪に障る。裕真の馬鹿発言に食って掛かるも、裕真はどこ吹く風といった感じに、しかもまるで癪癪持ちの子供に接するような態度で宥めてきた。腹が立つ。

こんな奴にあの桜の木を見せるのかと思うと気分が沈んだ。

案内をするのをやめようかと思ったが、結局のところオレは桜の木を二人に見てもらいたかったので何も言わなかった。

あの桜の木を他人が見たらどう思うのか。どう感じるのか。

オレはそれを知りたかった。

未熟で不完全なオレよりも、裕真の方がそっちに詳しい。あの桜の木が悪いものかと鑑定して欲しいのもある。

だけど、とふと思う。もしあの桜の木の腕が人間にとって悪いものなら、オレはどうするのだろうか。

考えて、考えるだけ無駄だと気付き思考を止めた。

クレープも無くなり斜陽が射してきた頃、オレ達三人はその桜の木のある広場に着いた。

砂利が敷き詰められた広場に、大きな桜。今日も桜は枝に咲いた花に重そうとしている。

オレが桜の幹に生えた腕を説明する前に、裕真が目を輝かせて桜の木に小走りで向かった。

「う、うおー！　なんだコレ、スゲー！」

「ちょっと、何興奮してんのよ裕真！」

「うわっ、ヤッバー！ なにこれうはー！ 超半端ねえー！」

裕真は子供みたいにはしゃぎながら絶賛した。

裕真に遅れて近寄った杏奈は、裕真が何に興奮しているのか分からない様子で首を傾げている。

杏奈はそういうものに疎い。一般人である杏奈には腕が見えていないのだ。

オレはそれを見て、やはりあの腕は心霊現象物だったんだと確認した。

本人には悪いが杏奈は良い線引きになる。

「黒ちゃん！ これいつから生えてんの！？」

「さあ。オレが幼稚園かそこの時にはもう生えてたと思う」

「はあっ！？ そんなに昔から生えてたのかよ！ ああもうなんだよ水くせえ。それならそうとさっさと俺に見せろっつーんだよ！」

「めんどい」

「たった四文字でばっさり切んなよお前さあー」

「ねえ二人共。悪いんだけど見えない私にも何が生えてるのか教えてよ」

「腕」

「え？」

「青白い、多分女性の腕が幹から突き出てる」

「……………ホラー？」

「うん」

「うっはー！ マジスゲー！ 興奮物だよなあコレ！」

怖い話が好きなわりに怖がりな杏奈が微妙な表情を浮かべている脇で、裕真は興奮しきっていた。

腕の周りをぐるぐると上から下から右から左からと忙しく観察している。とても気に入ったようだ。

腕を観察している裕真を観察しながら、オレは気になっていたことを訊いた。

「それ、悪いもんか」

「あ？ あー…………」

オレの言葉に裕真は忙しく動かしていた顔を止め、青白い腕を凝視する。

少し、ドキドキしていた。

どうなのだろうか。この腕は、オレの腕は悪いものなのだろうか。

オレは、その腕が悪いものだろうがなんだろうがどうでもよかった。だがその腕が悪いものだったとしたら他の人間にも危害を加える存在である可能性が出てくる。そうになると、オレは嫌な気持ちでいっぱいになった。

オレはこの気持ちの名前を知っている。嫉妬だ。

オレに危害を加えるのならいい。でもオレ以外に危害を加えるのが、たまらなく嫌だった。

裕真の言葉を待ち、そしてようやくその口が開いた。

「悪いもんじゃないね」

「……そうか」

オレは安堵にため息を吐いた。

杏奈はオレのため息を違う風に解釈したようだ。「大丈夫だってさ」と安心していいよと暗に言っている顔でオレの背中を一つ叩いた。

「ただなー。おかしいんだよなあ、コレ」

裕真が青白い腕を間近で見れるように曲げていた身体を正しながら言った。

顎に手を添えて悩む姿はキザったらしいのだが、妙に様になっている。

オレは裕真の言葉に心臓が跳ね上がった。

もしかして、悪いものではないが他人に干渉するものなのか？
焦りに訊ねようとしたが、それよりも先に杏奈が言った。

「おかしいって、何が？」

「ああ。この木ってさ、なんの種類の木なんだろうな」

「？ なんのって、桜でしょ」

「いやあ違う違う。桜の中でも種類ってあるじゃん。ソメイヨシノのとかそこらへんの。俺最初この木見た時柳桜かと思ったけど、枝があんましなつてないし硬いから違うって分かったんだよな。これ、なんの種類だろ」

「確かに。普通の桜っぽいけど、普通の桜ってこんなにしないしね。柳桜は逆に、もっとしなつてるし」

「そそ。んで、それともう二つ。この桜ってこんなに立派なものになんでここに人が集まってるんだ？ ここって集会所が近くにあるし、近隣の住人が花見に来ても良いだろ？ 働いている奴ならいいの分かるけど、奥様方やら子供が来てないのはどうよ」

「主婦も忙しいのよきっと。それに子供も、花見より自分達の遊びの方がいいんじゃないの。花より団子とも言っし」

「その流れでその例えはなんか違うくねえ？」

「うるさい。それが見慣れてるんじゃない？」

「んー。そうなのかねえ」

裕真が顎に手を当てたまま深く首を傾げる。

オレは桜の木を見上げた。裕真の言葉はもつともだ。

他の桜とは一線画する立派な桜。なのにオレはこの桜で花見をしている人間を見たことが無かった。

どれだけ考えても、人一人さえ桜の木の傍にいた人間を思い出すことはない。

オレに問うような目を向けていた裕真に、頷くことで答えを返す。

裕真は「そうかそうか」と何度も頷いた。

「で、最後の一つはなんなの？」

「ああ、うん。さっきこの白い腕のことを悪いもんじゃないって言ったろ？ んでもさ、善いもんでもないんだよな。なんつーの、害が無いだけで、ちょっとおかしいんだよこの腕」

「おかしいって、どうおかしいんだ？」

「……………。どうおかしいんだろうなあ……………」

「はあ？ ちょっと何よそれ！」

杏奈が素っ頓狂な声をあげる。

裕真は裕真で、本気で悩んでいた。時折「魅入られて？ いや魅入ってか？」とぶつぶつ言っている。

オレは裕真の言葉を一つ残さず聞き漏らさぬよう集中した。

ぶつぶつと何事かを呟き考え込んでいた裕真は、ふと青白い腕に向かつて手を伸ばした。

オレは、それを見て――……

「ねえ、もう暗くなってきたし帰ろうよ」

「ん？ あー……。ま、そうだなあ」

裕真が腕に触れる前に手を引いた。

身体にいつの間にか入っていた力が息と共に抜けていく。

オレは自分が緊張していたことに気付き恥ずかしくなった。誤魔化すように辺りに視線をやる。

途中裕真と目が合い、目を細めてオレを見ているその姿に気まづげに顔を逸らした。

裕真は目敏いので何か勘付かれたかもしれない。不用意だったと舌打ちしたくなったが、寸でのところで呑み込んだ。

「桜の木は今日はおあずけ、ってね。んじゃ、帰ろう」

おちやらけて言う裕真は、オレの行動を追及することはない。オレはそれに感謝しながら頷く。日はもう落ちていた。辺りが余韻で薄ぼんやりと明るい中、街灯が点き始めている。

オレ一人自転車を押しながら三人で帰路につく。裕真と杏奈が今日のご飯は何かとか明日の授業は何かだとか雑談している隙をつき振り返ると、やはり集会所の街灯は点いていなかった。

物寂しげに見える桜の木を置いて、オレは一つ物憂げに息を吐い

た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7911s/>

春夏秋冬、非日常的な日常奇談

2011年6月26日17時25分発行